令和３年度第１回総合教育会議　会議録

開催日時	令和３年５月 20 日 木曜日　　13 時 30 分から 14 時 58 分まで
開催場所	二宮町役場第一委員会室
出席者	村田邦子町長、森英夫教育長、渡辺優子教育長職務代理者、 野谷悦教育委員、岡野敏彦教育委員、山内みどり教育委員
町部局	政策担当部長
教育委員会	教育部長、教育総務課長、生涯学習課長、教育総務課長代理、教育総務班長
その他	傍聴　２人

※会議次第および資料は、別添ファイルのとおり

会議記録

１．開会

（司会：教育部長）

開会にあたり、司会（教育部長）より会議の公開を諮る。

－許可、傍聴者入室、着席－

２．町長挨拶

（町長）

今年度１回目の総合教育会議ということで､年間の様々な進め方をお話したいと思います。この総合教育会議では、町部局と教育委員及び教育部局の方でいろいろと意見交換をして、教育に対する様々な提案にしっかり結びつけたいと思いますので、よろしくお願いします。

３．協議・調整事項

（町長）

まずは、年間を通しての総合教育会議のテーマ設定について決めていきたいと思います。事務局より説明をお願いします。

―事務局より説明―

（町長）

それでは、年間のテーマについてです。状況によっては、その時々に色々なことがありますが、事前の資料や意見の準備等を考慮するとある程度決めておく必要があると思います。年間のテーマ設定についていかがでしょうか。

（岡野委員）
今年度の議論するテーマとしては、今ここにあがっているものが中心になると思います。ICT に関しては、ようやく子ども達のハードウェアの整備が整ってきています。ハードの整備とソフトウェアの使い方がスタートしたばかりで、先生方の負担や町の財政的な負担等もあるとは思いますが、丁度過渡期であるので、しっかりと方針を立てて、その目標に向かって活用していくんだというマインドセットをする時期なのかなと思います。方向性を見定める議論をしっかりと行っていく意味では、絶好のタイミングかと思いますので、今年じっくり議題として意見交換をした方が良いです。
もう一つは小中一貫教育についてです。町全体として子ども達の人数が少なくなっていくのは避けられないことであって、そこに対してどう取り組んで行くのかという課題に対する一つの選択として小中一貫が準備されていると思います。しっかりと議論して、ここを中心に据えていきましょうというマインドを決めるという意味では、良いタイミングなのかなと思います。そしてそれを下支えするものとして、やはりコミュニティ・スクールという地域の力があると思いますので、おそらく小中一貫とコミュニティ・スクールはセットなのかなと感じます。いろいろなカリキュラムの面と、地域との連携という面も含めて、一貫教育をどう組み立てていくかというのが議論の中心になると思いますので、この辺りのテーマ設定がいいのかなと直感的に思います。一方で、町民の方のマインドについても考える必要があります。この状況なのでなかなか集まれませんが、勉強したいという気持ちを皆さんお持ちだと思います。皆さんの興味関心等のニーズに対して、町として環境を整えて応えていくというのは、やはり継続的な活動として重要なことだと思います。まさに生涯学習と言われている部分の領域だと思いますので、4 や 5 も（注釈：4.町民大学や 5.体育事業のこと）この時期だからこそしっかり考えていくべきなのかなと感じています。今年のテーマ設定としてはこういったところを中心にやっていくのがいいのではないかなと感じています。

（町長）
ありがとうございます。それぞれ繋がりがあるテーマだと思いますので、共通の課題として捉えながら話を深めていきたいと思います。今後、5 つのテーマを話し合っていくことになると思いますが、特にこういう視点が必要であるといった意見はありますか。

（教育長）
1 点気になったことがあります。コロナ禍に対する子ども達や町の文化・体育施設等の対応については、ワクチン接種が始まったことにより、日常で対応するものになってきていますが、対応を整理する意味でテーマとしてあげても良いと思います。皆さんのご意見を聞かせていただければと思います。

（町長）
学校教育の場のみならず、様々な場面で影響を受けていらっしゃいます。意見交換を通じて、

必要な対策や施策に結び付けていく必要があると思います。テーマの一つとして入れるか、もしくは全体を通して取り扱っていくこととしてはいかがでしょうか。

（教育長）
テーマの 1、4、5（注釈：1.ICT、4.町民大学、5.体育事業のこと）についてはコロナも関連する話になるため、あえてコロナというテーマにしなくても良いのかなと思っています。

（岡野委員）
子ども達のコロナ対策というのは、日々、先生方ご尽力いただいている部分ですので、何か大きな変化点等のきっかけがあれば、そのタイミングで議論するべきかと思います。ここに項目として一つあげるかと言われると、やはりそこは定常的に取り組む土台の部分だと思うので、そこは大きな変化点があれば、そのタイミングで意見交換をすべきかと思います。

（町長）
では、全体の中で取り扱うことにします。様々な場面で大変な影響があり、例えば、日本全国でいえば子どもの自殺件数も増えているようです。現在、学校現場では、子ども一人一人にちゃんと向き合いきめ細かく対応していらっしゃると思いますので、今後、対応する中でピックアップすることがあれば、その時点で報告していただきたいと思います。また、コロナ対策は福祉にも関わる部分だと思います。町内でもこども食堂を活動されている様々な団体があり、子どもだけでなく、家庭等に対する支援を目的に活動されています。状況が報告出来るようになればこの場をお借りしてお話していきたいと思います。今後、気づいた点があれば、その都度意見交換をしていきたいと思います。それでは、年間を通しては５つのテーマを設定し、相互に関連させながら意見交換をしていきたいと思います。よろしいでしょうか。

―全員、了承。―

（町長）
それでは、「ICT 活用教育の推進について」及び「小中一貫教育について」について、事務局より説明をお願いします。

―事務局より説明―
（町長）
プログラミング教材 MESH 44 セットは中学校のみですか。

（教育総務課長）
小中学校共用となっています。

（町長）
通常の教科の中でこのプログラミング教材を使っていくのですか。

（教育総務課長）
そのとおりです。

（町長）
そういう授業がある訳ではないのですよね。

（教育総務課長代理）
中学校の技術科には「プログラミング」としての位置付けがあります。それ以外の教科では、算数や理科、総合的な学習等でプログラミングを使って課題を解決するのに使用しています。

（町長）
分かりました。見る機会があれば見学をしたいと思います。また、ドリル教材は個別の能力や個性に合わせて進めることができるとのことでしたが、これは授業の中で使用するのか、それとも宿題や自宅学習で活用されているのですか。

（教育総務課長代理）
今のところ、学校と家庭で使用する場合の両方を考えています。学校で使用する場合は、各単元の終了後の復習や定着を図るために使います。家庭で使用する場合も、基本クラウド上でログインの ID とパスワードがあれば使用できるので、家で勉強したいと思う子ども達は自主的に使用することができます。宿題については、まだ家庭の ICT 状況が揃わない状況なので、そこまでには至っていないです。

（町長）
いち早くデジタル教科書も導入されたので、活用していっていただきたいと思います。数年後には、リースや機材の更新、またソフト等を検討する時期が来てしまいます。今後いろいろなハードやソフトも開発されてきますので、ICT の専門的な知識もいれつつ、一方で教科書採択との整合性も図りながら、良質で且つ予算的にも適切なものを選定していくことが求められます。そのあたりについて、専門家からするといかがですか。

（岡野委員）
ICT の場合はその都度の使い方の課題があると思いますが、安定運用という視点で見ると、ハードウェアの更新、日々のネットワークや個々のハードウェアの運用、場合によってはアップデートがあります。そういうものも含めて、日々の安定運用が大事な課題になっていく

のかなと思います。あとは予算の確保と人材の確保の面です。学校にある数百台の ICT を一人で面倒を見るのかというところにも結局はいくので、やはり町としては財政面と安定運用のための人材確保が課題になっていくと思います。
課題のところでオンライン授業というのがありますが、学校から家庭への配信のほかに、教室間のオンライン通信という使い方もあると思います。不登校の子が学校には行けるけど教室には入りたくないという状況があるので、保健室で教室の様子が見える、或いは自宅ややまびこからといった使い方もあると思います。全家庭に配信するだけでなくて、教室間や学校間での通信、もっと拡大すると海外の学校と通信する等いろいろな使い方があると思います。いろいろな壁を乗り越えて交流ができるようになって、今までの常識で想定してきた敷居が一挙に解き放たれるので、いろいろな使い方を模索していくことが必要なのかなと感じます。

（町長）
ありがとうございます。

（教育長）
岡野委員に心配していただいた ICT 関係の保守管理については、今までは教育総務班長一人で担当していました。ただ、非常に台数も増え、環境整備、ソフト面での対応、ルール作り等業務が多岐に渡ることから、町長とも相談させていただきながら、兼務辞令ということで町の情報システム担当の職員と連携できるような仕組みづくりにしていただきましたので、ご承知おきください。

（町長）
現在はそのように行っていますが、今後は教育だけではなく役場全体も ICT 化を推進していくので、やはり専門の職員が必要になると思います。今後、システムエンジニアといった専門職員を配置し、町全体で強化していきたいと思っています。人材支援については行っていかなくてはならないと思っています。教室間のオンライン授業については、やまびこ教室にもタブレットを配置しているのですか。

（教育総務課長）
配置しています。先ほどの岡野委員の話について、二宮の事例を紹介させていただきます。まず一つ目として、支援級のお子さんが通常学級と交流する時になかなか教室に入りたがらないという場合に、zoom を使用しました。また、支援級交流会の時も、密にならないように各教室に散らばって zoom で繋がって交流しました。もう一つの事例として、大磯小学校と二宮小学校の支援級の児童同士が交流したということもあります。一方で、不登校のお子さんについてですが、ご家庭に Wi-Fi 環境があるお子さんに関しては、家庭の Wi-Fi を使用するという前提で既に一台お貸ししています。

（教育長）
中学校はさらに進んでいまして、生徒総会や生徒会役員選挙などで、体育館での発表を中継して各教室で見ています。或いは参観日の時に保護者の方が学級の中に入らなくてもいいように、学校の中の行事や様々なものを撮影したものを体育館で放映するといった形で、様々な工夫をして日常的に使い始めています。ホームページにも日々使用している様子が掲載されていますので、是非見ていただければありがたいなと思っています。

（町長）
物理的な距離が無くなることで瞬時にオンライン上でコミュニケーションがとれますが、対面でのコミュニケーションをどう補っていくかがこれからの学校の課題になってくると思います。オンライン上ばかりのやり取りではなく、やはり対面のコミュニケーション能力も求められてくるので、両方の部分を活用して伸ばしていけたらと思います。また、今後、タブレットや Wi-Fi 環境はランドセルのように個人負担で用意するものなのか、義務教育として学校で用意するものなのか、その辺りの位置付けは、国での議論がまだされていないので、神奈川県町村会等を通じて国に働きかけていきたいと思っています。

（渡辺委員）
ICT 活用教育については、タブレットの活用について様々始まっていて、マインドセットが浸透してきているのも良いなと思っています。最近、明星大学星山先生の、発達支援講座を受けて学んだ中に、脳の機能として空間認知の違いがあり、それらに対応するのにタブレットを活用するのも一つの手ではないかと思います。例えば、黒板の字が歪んで見える脳機能もあり、見えにくい場合にタブレットで撮影し拡大してみるだとか、周囲の声が気になってしまう場合に読み上げでサポートする等、支援級での活用以外にも、通常級の中でも必要だと思います。眼鏡と同じように、その子をサポートするための道具と同じような感覚で、タブレットを活用出来ればと思います。それには理解が進んでいくことが大切です。ただ、一番の課題は他人とは違うことを本人も親も気づいてないというパターンがすごく多いことです。本当の理由に気づかないまま、その子が怒られてしまうだけで、解決に結びつかない事例もあるので、ちょっとした脳機能の違いの理解が ICT 活用とも繋がっていけたらいいなと感じました。

（町長）
ありがとうございました。発達障害には、外から見えない症状が様々ありますが、まずはそういう障害があるということを、先生も子ども達もお互いに認め合うところが大切ですよね。今後、そういう部分が是正できる技術も開発されると思うので、情報収集して有効に活用していきたいと思います。

（教育長）
ICT 教育が進むことは良いことだと思いますが、忘れてはならないのが体験学習の良さです。子ども達が実際に物を触るといったことが欠けてしまい、何でも ICT になってしまうのは違うと思います。よく視聴覚教材といいますが、人間には五感があって、視覚聴覚はタブレットで見たり聞いたりできると思いますが、触覚や嗅覚や味覚はできないことです。特に、支援級の子ども達にとっては、本物の良さを体感しないと、画像だけで身につけることはできないので、そういったところは忘れてほしくないと思います。

（野谷委員）
先週、東京ビックサイトの GIGA スクール構想の実現に向けたシンポジウムに行ってきました。今までは教室内で学びが完結していたのですが、そういった学習観が変わるような内容でした。教育長が例に出していた体育館での生徒会の立会演説を教室で見るということですが、これを家庭にも配信したらどうかと思いました。つまり学びが教室の枠を超えて、地域に広がるということです。相模原市の小学生がつくったプログラミングの不具合をオーストラリアで発見し、その後連絡を取り合いながら修正したという事例もあります。ネットは教室だけでなくて、学校、地域、或いは世界に広がる、その様な意味で新しい学びというのは、そこから生まれる可能性があると思いました。一方で、新潟県は 50 代の先生が多く進めるのが難しいという話があります。ただ、自治体格差、学校格差、先生格差については本来あってはいけないわけです。それを乗り越えるためには、先生の頑張りだけではだめだと思います。そのためには、一つとして、文科省の特別予算のなかで授業・校務支援・環境整備・校内研修などを行う「ITC 支援員」をもっと活用していくなど条件整備をしていってほしいと思います。ちなみに管理職にはタブレットが配られていないというのは本当でしょうか。学校では管理職を動かすのが肝と言われています。現実に ICT に追いついていける先生は一部です。それも含めて、一定程度学校教育を底上げするために、管理職と学校で一緒に学ぶ雰囲気等を行政がサポートする必要があると考えます。

（教育総務課長）
校長、教頭等の管理職は持っています。ただ、過去に配布したタブレットであるため、最新機種ではありません。

（町長）
一応、管理職はもう持っているということですね。

（山内委員）
項目 3（注釈：3. コミュニティスクールのこと）の活用状況について、現場の先生達がどのように捉えられ苦労されているのかをいつも意識しています。数年前は学校ホームページづくりがなかなか進みませんでしたが、このコロナが後押ししてくれた形で、各学校が楽

しく見応えのあるものをどんどん更新して、とても活発に活用しているのはとても良いと思います。もう一つは、先ほど二宮がいち早く取り入れている紹介がありましたが、本当に感謝しています。いろいろなところで瞬時に手を挙げてくださり、このICTに関して努力してきたことが今ここで花咲いていると感じました。小中一貫教育とコミュニティ・スクールにも関わってきますが、地域の大人達と学校の先生がタイアップして上手く補っていけばいいなという中に一つとして、ICTがあると思います。昨年、二宮ロータリークラブが、プログラミング寺子屋というような名前で、二宮中学校と一緒に実施しました。そういうのも地域の力だと思います。物品や場所だけでなく、スキルを持った方々を発掘して学校のニーズとマッチするような仕組みがつくれたらいいなと思います。やはり人と人はお互い信頼関係がないと絶対にこれは上手くいきません。二宮はたくさんの自然に囲まれており、この町の良さを教育の場で打ち出していく必要があると考えています。それらを踏まえた教育環境を作り上げるために、新しく二宮に移住してくださった若いお父さんやお母さん方にも、一緒に取り組んでもらえる形になったらいいなと思います。そういう方々が参加してくださるのに ICT はとても適した部分だと思いますし、また、上手く連携して、一緒に子育て、教育をやっていけるような形ができていけばなと思います。

（町長）
ありがとうございます。コミュニティ・スクール、地域学校協働活動といった中で、地域にICTに長けた方が多くいらっしゃると思います。学校ごとの状況もあると思いますが、出来るところから連携できたらと思います。その辺りは柔軟に取り組んでいきたいと思います。続いて、小中一貫教育の６つの手立てについて、事務局より説明をお願いします。

―事務局より説明―

（町長）
ありがとうございます。小学校の英語授業はもう始まっているのでしょうか。

（教育部長）
令和２年度から５、６年生が始まっています。

（教育長）
教科としてはそのとおりです。ただ、文科省では小学校１、２年生は特別必要ではないとのことですが、二宮町では独自に年間数時間ですが、外国語活動を行っています。

（町長）
それぞれのカリキュラムの実践が増えて楽しみだと思います。また現場も見ながらだと思いますが、子ども達が羽ばたいていけるよう頑張っていただきたいと思います。

（教育長）
昨年度できたものがこちらになります。全ての教科ができているので、これを基に今年と来年研究し、令和５年には分離型のスタートを迎えたいと思います。なお、検証するために２年間いただきたいということで延ばした経緯があります。また、小中学校の先生がそれぞれの学校を知らないといった状況もあったので、今年は小学校の教員が一日中学校を体験するといったような取り組みを始めます。全教員は無理ですが、可能は範囲で教員の交流をしていこうということです。一日校内の様子を見るのも良いですが、教科担任であれば授業を行うこともあり得るということで、検討しています。また、エコフェスタで子ども達が活躍したことを受けて、そういった取り組みが学校の中でも生かせるように、総合学習として「二宮で学ぶ」「二宮を学ぶ」「二宮の為に学ぶ」といった３段階の視点で育てていけたらいいなと願っています。

（野谷委員）
総合学習の一つの大きな目標と考えるので、その３段階はその通りだと思います。エコフェスタでは、子ども達が自然保護に関わるボランティアについて学んだそうですが、テーマである環境以外にも歴史や農業といったことについても知る必要があります。例えば、二宮の歴史年表を作ろうとした時に、ホームページでは情報が不足しているので、古い広報にのみや等により情報を埋めていきました。ただ、広報にのみやは整理されていて分かりやすいのですが、無駄なものがなく、資料としては積み上がらない問題を抱えていると思います。また郷土二宮等の古い本はありますが、総合学習で使えるような資料ではありません。そのため、二宮学を始める時のガイドブックのようなものを早急に作っていくことが、総合学習に寄与すると考えます。

（町長）
その部分、複数年で作成していく予定ということで楽しみにしています。これは、二宮の為に学ぶだけにとどまらないと思います。地元を学ぶと、他の地域や世界の状況にも目が向いていくので、そういったところにも膨らませていただけたらと思います。小中一貫も教科だけでなく、社会学といった部分も含めて探究できる教育の現場になっていくのではないかとわくわくしています。また良い事例があったら、ホームページ等を通じて教えて下さい。

（岡野委員）
小中繋げてカリキュラムを組むというのは、やはり根本的に必要なことなのかなと感じます。例えば、苦手な科目が増えてきた時にどこで躓くかというポイントをしっかりフォローしながらやっていくことが重要なのかなと思います。一つ出来ないと他も連動して理解できなくなってしまうので、科目を超えた連携も必要なのかなと感じます。その辺り、教科書

の選定時に組み合わせを気を付けていました。先ほど、中学校の生徒会を中継する話がありましたが、その姿を小学校のうちから見るというのも大事なのかなと思います。６年生以降のもっと先の世界を見せておくこと、そして中学１年生は下の学年に見られて、一番下っ端ではなく自分は先輩なんだという意識にもなりうると思います。やはり先が見えるように、後ろからも見られているという意識を中学生が持つようにしていくのも、小中一貫に繋げていくことの大きな役割だと感じます。カリキュラム、小中一貫、ICT、全て連動している話なのかもしれませんね。使えるものはフル活用して、組み合わせて、たくさんの選択肢が持てたというマインドで賢く使っていくのがいいのかなと思います。

（山内委員）
その意見に賛成です。大学もオンライン授業と対面でやらなければならない授業は仕分けがされていて、どちらも必要だと分かりました。対面した時に初めて信頼関係が出来ていくので、上手に両方活用していくのがこれからの私達のやるところだと思います。小中学校に来られない子がクラスの授業を見られるようにしていく方向や、小さな町なので町内の転校を自由にする、学区を緩やかにする等いろいろな方法があると思います。多種多様な方法が講じられているという教育体制になっていくといいなと思います。小中一貫のワーキンググループでは、全ての先生がどこかに所属するわけですよね。それまでなかったことなので心配でしたが、順調に内容の準備が進んでいていると感じます。「(4) 特別活動グループ」については、小学生は中学校のことを知らないので、これから行く中学校を直に見せていくと良いと思います。カリキュラムの次は、現場の子ども達を交流させる場をたくさん提供してあげられるようになると、分離型で始まる小中一貫もできてしまうと思います。行動に移していくということを今年度お願いしたいと思います。

（町長）
ありがとうございます。実際にカリキュラムはできてきたということなので、今後も総合教育会議で報告いただいて、共有していきたいと思います。山西小と一色小の学校間の交流もいろいろ進めていっていただきたいと思います。他に何かご意見はありますでしょうか。

（渡辺委員）
コミュニティ・スクールについて、少し先に取り組みを進めている一色小学校では、人手不足の解消として、地域の人材バンクのような登録の仕組みを作って、学校のニーズに沿わせてサポートできるようにやってみようということで、具体的に動いていることを聞きました。やはり先生一人で全て見るのは難しいので、少しでも地域の人にたいして学校を開いてもらい先生が楽になれば良いなと思いました。一色小で関連して、先生が休息できる場所が必要なのではという声があると聞いています。職員室は、電話や児童の出入りでなかなか休めないので、一人で休める場所があれば午後の授業に生きてくるのではということで、具体的に学校とコミュニティ・スクールで検討が始まっているようです。こうした取り組みが成

功事例として他の学校にも伝わっていくとコミュニティ・スクールにも生きてくると思い、お伝えしました。

（野谷委員）
一色小学校は厳しい状況です。各学年で先生が一人ということは、８～９教科を自分一人でやっていかなくてはいけません。そして相談する相手がいないと計画性が持てないため、ベテランでも追い込まれてしまうと思います。相談相手については管理職も対応してくれてはいますが、それだけでは不十分です。先ほどの地域の人の力を活用するということで、今年は中学校まで地域学校協働活動推進委員が設置されましたが、一色小学校の方は頑張ってくださっていると聞いています。ただ、その支援を学校側が受け取り、コーディネートする人が必要ではないかと思います。クラス担任を持つ教員では無理なので、自由な立場で、コーディネートする人の存在がほしいと考えています。来年度の予算に向けてお願いします。

（教育長）
一色小学校の状況については、十分承知をしており県にも申し入れをしてあります。今年については学級経営支援ということで、他の学校には付いていない非常勤を配置しております。また昨年度は学級運営改善非常勤という形で、２回に渡って教員を配置したこともあります。これからもいろいろな手立てをとって、教員の方を補充していきたいと思っています。

（野谷委員）
教育委員会が頑張ってくれているのは承知しています。ただ、そこではなく、地域と繋ぐ役割の方をお願いしたいと考えています。

（町長）
地域学校協働活動推進委員は５校に入っていますが、小規模、大規模といった各学校の課題や特色に合わせた活動を考えていくことが大切だと思います。

（教育長）
先日、学校長と話をしましたが、一色小学校と地域の方との連携は非常に進んでいるそうです。昨年度末に行われた修学旅行の代替や今年もいろいろな行事があるといった時に、今までは先生が企画、相談、準備を全てしていたのですが、地域の方に呼び掛けただけで積極的に参加してくださるそうです。地域学校協働活動が進んでいることが報告されていますので、これからも推進委員の方を中心にまた頑張っていただければありがたいなと思います。

（町長）
その辺りは是非応援をして、見守っていきたいと思います。それではよろしいでしょうか。

また次回も５つのテーマについて、いろいろな現場の事例や報告を聞きたいと思いますので、よろしくお願いします。それでは進行を事務局へ戻します。

（教育部長）
どうもありがとうございました。次回は令和３年８月 20 日（金）ですので、引き続きよろしくお願いします。それでは本日は長時間に渡りありがとうございました。

―会議終了―